

「学校の怪談」の記憶とそのリアリティー

—「先生が教えてくれた話」をめぐる—

佐藤 喜久一郎

1、はじめに

「学校の怪談」は、子どもたちの想像力を形にしたものであり、児童・生徒の置かれた状況を象徴的に語り出すものとされる^①。そのため多くの研究者は、語られた「怪談」の内容を分析すること^②で、子どもの内面や心性の解明を試みてきた。

ただし、学校で児童生徒たちが接する「怖い話」の全てが「学校の怪談」とみなされてきたわけではないし、学校文化のなかでしかるべき位置を占めてきたわけではない。たいていの「怪談」は、日々の生活のなかで世間話として消費され、忘れ去られてゆく運命にある。また、深刻な内実と社会的背景を持ちながらも、その象徴的意味を理解されないまま消えてゆく「お話」も少なくない。

さらに近年では、学校を取り巻く社会状況の転換に伴い、「怪談」に対する社会からの評価が次第にネガティブなものに変わ

りつつある。子どもの安全が脅かされる事件が学校で頻発していることから、公の場で「怖い話」をすることが忌避されるようになったのである^③。その傾向はとりわけ教師たちの間で顕著であり、かつては「学校の怪談」の良き伝承者であった彼らも、近年では自分の「怖い話」が子どもの心を傷つける可能性や、保護者からのクレームの対象となる可能性を意識せざるを得ない^④。とりわけ、具体的な事件を連想させる話や生徒に悪影響を与える話はタブー視されており、慎重に子どもの耳から遠ざけられるのである。

そうした社会状況のなか、一体どんな「お話」が現代の「学校の怪談」の座を占めるのだろうか。本研究領域においては、同名の児童書や映像作品の享受が、ジャンル形成に強く寄与したことが知られる^⑤。「トイレの花子さん」や「テケテケ」など、「学校の怪談」として誰もが思い浮かべる話のいくつかは、メディアを媒介した大衆的消費を通じて、その「古典」としての正統性を獲得したものである。しかし、現代の消費文化の

影響のほかにも、豊かな「怪談文化」を学校共同体に根付かせた要因はいくつか想定でき、昨今は関係論的視点から「学校の怪談」を考察する論者が多い。例えば山田巖子氏は、「怪談」を生み出すのは学校社会におけるコミュニケーションのあり方であるとして、「学校の怪談」の背後に子どもたちの豊かな文化的営為を見いだしている。それによると、①児童社交、②語り手の演技的パフォーマンス、③場所・空間の意味付けと解釈行為、などが重なり合って怪談的言説の誕生に繋がるというが、この過程に介入するのは単に子どもばかりでなく、教職員などの大人が「怪談」の「発信源」になることも見逃せないという。⁶⁾

ただし、文化の形成に集団外部の人間が関与するのは「学校の怪談」だけの特徴でなく、「子ども文化」一般に顕著にみられることかもしれない。一例を挙げれば、軍歌や戦時歌謡などの分析を通じて「子ども文化」の研究を行う鶴野祐介氏は、「替え唄」のような「子ども性」に満ちた文化的営みの場合ですら、実際に歌詞を作成したのは周囲の大人や青年たちである例があることを指摘している。「替え唄」は無作法という建前が存在する一方で、戦時においてなお、子どもの社会風刺の唄に共感し、深い思い入れをする人々が多かった。鶴野氏によると、マジメな「子ども文化」は、「大人と子どもとの応答関係のなかで、両者の共同作業」のもと生まれてくるとされる。⁷⁾

子ども文化論の領域では、「学校の怪談」に関しても、吉岡一志氏が教師と子どもとの関係に注目したユニークな研究に取り組

んでいる。吉岡氏は松谷みよ子氏の『現代民話考』に収録された「学校の怪談」のなかから、「投稿者」が教師と考えられる四百三十三篇の語りを取り上げて検討を加え、怪異のリアリティをめぐる子どもと大人の感覚のずれを指摘した。教師は一般に、自身と同僚が体験した怪現象にはリアリティを感じて感情移入する反面、子どもたちが語る「怪談」に対しては、フィクションだとして軽視する傾向が強いという。ところが、両者の力関係の非対称性ゆえに、リアリティをめぐる子ども対大人の文化的せめぎあいはいくらもない。何を「現実」と看做すかの審級が終始大人の側にあるため、子どもの「怪談」は常に「虚構の語り」とみなされて独自の閉域的ジャンル（＝学校の怪談）を形成することになるそうである。⁸⁾

しかし、もしそうだとしても、以上のことは「現代民話考」が編纂された時代のものであり、現代日本の文化的状況とは異なっている。吉岡氏自身も指摘しているが、90年代以降の学校においては、大人対子どもの力関係が劇的に変わりつつあり、「学校の怪談」についても教師の優位性が大きく揺らいでいる。いまや一部の繊細な生徒への配慮から、教師が子どもの前で刺激的な話をするのを躊躇する状況であり、結果として「語り」自体が抑制されるほどなのである。

こうした「怪談」をめぐる学校文化の質的变化については、世間話研究の分野でも近年興味深い報告がなされている。例えば川島理想氏は、論文「ゲーム化する怪談に関する考察」⁹⁾のな

かで、調査地の児童が怪談に対して示すシビアな態度について述べており、示唆される点が多い。

それによると、現代の子どもたちは「二十年前よりも情報に溢れているから、目新しい情報で、尚且つ話がうまくなければ誰も耳を傾けない」し、調査に際してもなかなか自分からは怪談を話してくれない。そのため、民俗学者による「学校の怪談」の調査においても、研究者があえて「語り手」になって関心をもたせることから始める他ないという。また、そうした働きかけの結果、なんとか「怪談」に興味を覚えた子どもたちも、多くの場合は受動的な聞き手のままにとどまり、自ら語り手となって「お話」を広めようとした事例は稀だったというのである。

以上のような文化の質的転換を鑑み、本論文では「学校の怪談」の現在を問うことに意を注いだ。現代の子どもたちは、もはや怪談文化の受動的な消費者でしかないのだろうか。「子ども文化」が大人と子どもの関係から生まれるとしたら、現代的な「学校の怪談」は、両者のどんな相互行為によってつくられるのだろうか。以下に述べるが、確かに筆者自身の調査においても、現代の学校では教師が「怪談」の語り手となる事例が顕著にみられた。しかし、その事実を直接「怪談文化」の衰退を意味していない。「学校の怪談」が生徒たちに享受され、自分のものとして内面化される過程では、無数の異伝や訛伝が再生産される。⁽¹⁰⁾筆者が本論文で注目するのは、そうした創造的実践が「怪談文化」にどのような実りをもたらすかということである。

「学校の怪談」には、「世間話」として消費されるものと、自身の学校で「本当におこった」こととして長く伝承されてゆくものがある。後者において、「怪談」の伝承化はいかなる条件下でなされるのだろうか。教師という権威ある「大人」が「お話」に対してどのように関与し、それに対して子どもたちがどのように反応すると、単なる「世間話」が「学校の伝説」となるのだろうか。

2、予備調査の結果と注目すべき傾向

(1) 予備調査の結果

調査の足掛かりとして、筆者は二〇二〇年十月から翌年の五月にかけて、自身が勤務するA短期大学保育学科に通う九十七名の学生を対象に、「人生でもっとも思い出に残る『学校の怪談』」についてアンケート調査を行なった。被調査者は、二〇二〇年度後期に筆者の「子どもの文化」の授業を受講した一年生であり、全員が調査時には十九歳もしくは二十歳だった。質問項目は以下の通りである。

質問…あなたの人生のなかで耳にした、もっとも印象的な「学校の怪談」は何ですか。

①どんな話ですか。②誰にいつどこで聞きましたか。③タイトルをつけるなら何ですか。④話を聞いてどう思いま

したか。⑤本当の話だと思いますか。

人生でもっとも思い出に残る『学校の怪談』を尋ね、「お話にあえてタイトルをつけてもらったのは、被調査者が「学校の怪談」について、現在どのように記憶し、自身のなかでどのように内面化しているか知りたかったからである。

まず、学生たちの記憶に鮮やかな「学校の怪談」に関して、その語り手だった人物について尋ねてみると、友人・先輩35例（同級生28上級生7）、家族・親族8例（父2、母3、その他2）、教師等28例（小学校教諭3、中学校教諭1、高校教諭23、放課後児童支援員1）、その他13例（不明、覚えていない、噂で聞いたなど）、自身の体験6例であった。¹¹⁾

以上の結果で注目されるのは、今日の「学校の怪談」が、必ずしも純粹な「子どもだけの文化」ではない点だろう。教師や家族が語り手である例が無視できない割合を占めるのに対し、上級生から「怪談」を聞く例は少ない。つまり、現代の「学校の怪談」はもはや子ども集団内部の伝承ではないのである。

いっぽう、語り手を「教師」とする場合には、授業、学校行事、クラスルームの活動のなかで耳にした話が印象的だったという回答者が多い。小学生の場合は読み聞かせや読書の時間に、中高生の場合は授業の息抜きとして、教師から「学校の怪談」を聞いた事例が目立つ。

ただし、聞き手の記憶に長く残るような、印象的な「語り」

ができる教師は稀であり、そうした人物が勤務する学校とそうでない学校とは、児童生徒の「学校の怪談」に対する態度が異なってくる。実は、教師等28例のうち、20例はA短期大学と同一学園内にあるA高校卒業生からの報告である。「体育館の手跡」「テケテケ」「七不思議」など、A高校にまつわる代表的「怪談」を授業中に教えてもらったのが印象的だったと述べられている。

以上のような極端な結果となった理由としては、第一に、調査の回答者全体のなかでA高校出身者が占める割合が高いこと（37名）、第二に、A高校出身者はA学園に対する愛着心が強いこと、第三に、短大生にとって高校時代に聞いた話は未だ記憶に新しいことなどが想定できるが、筆者が最も重要と考えるのは、A高校に「語り」を得意とする教師が複数名おり、研究に値する豊かな「怪談文化」が存在することである。

A高校を舞台とする「怪談」の内容を検討すると、「テケテケ」が9例、「体育館の手跡」が12例ある。これらは同校の「七不思議」に関わるものとされているが、他の「七不思議」に触れた3例を加えると、全体で24例もあるのだった。

もちろん、A高校卒業生のなかには小中学生時代に聞いた別の「学校の怪談」について報告した人もいるが、これらは全部まとめても13例しかなく、高校教師からの多大な影響が窺える。このことは現代的な「学校の怪談」のあり方を示唆する顕著な例と考えられるため、以下このA高校での事例をもとに考察を

進める。

(2) 注目すべき語り手とそのレパートリー

A 高校の場合、教師が情報源だとされる20例の報告のうち、語り手をA教諭とするものが13例、B教諭とするものが2例、その他が5例¹³⁾あった。注目すべきは、圧倒的多数の報告者が同一人物の名を挙げたことだ。

A教諭とは一体どんな人物なのだろうか。筆者は二〇二二年五月十七日にA高校を訪問し調査を行った。二時間ほどかけてA教諭にインタビューし、「学校の怪談」を語る理由、話の内容、場の雰囲気、語りの工夫などについて質問した。

A教諭は一九七一年生まれで、自身もA高校の卒業生である。二十五期生であり、高校時代はボクシング部に所属して充実した学園生活を送った。その後は別の大学に進んだが、卒業後すぐ地元に戻って母校の教師になったそうである。そして現在、A高校では現代社会の授業などを担当している。

「学校の怪談」の多くはこの現代社会の授業中に語られたものである。A教諭によれば「授業のなかで、まあちょっと集中が見られないときなんかの様子見て、今日はちょっとあれかな、集中あんまりしてないな、というときになんかね、こちらのほうに興味むけられたらと思ひまして、なんか余計な話をするんです」という。事情があつて生徒が授業に集中できないときや、疲れて眠っているときなどに、学校を舞台にした興味深い

「お話」をして気分転換を図っているというのである。

そんなときにしばしば話に上がるのが「A高校七不思議」であった。この学校では、七不思議の全てを知ると命を取られると言われているので、それを語るにあたりA教諭はまず、自分は七つのうち六つまでは話せると述べ、生徒たちの好奇心を掻き立てているらしい。

「七不思議だつて言ってるんですけど、七つ全部知っちゃうと死んじゃうらしいって。七不思議は七つ全部知っちゃうと死んじゃうらしくて。僕は六つ知ってるって。六つ知ってる。だから僕がもし死んじゃったら、あ、七つ目を知ったんだなって思うといいぞつて。で、僕基本的に怖い話あまり好きじゃないので、怖いのをおもしろおかしく伝えてあげられるとおもしろえて入るんですけど。で、先生こういうのをしってますか。つて言いにくるので、先生これつて……つて言ってくるから、いやいやいやそれは俺は聞かないよつて。知らないよ、死んじゃうからいやだつて」

「A高校七不思議」には「語り」としての体裁を持つものと、たんなる俗信¹⁵⁾に止まっているものがあるが、聞き手に好まれるのは娯楽性の高い前者である。なかでも「テケテケ」と「体育館の手跡」は人気が高く、学園に古くから伝わる「怪談」とされている。A教諭自身も、これらの話を高校時代に部活動の先輩から聞いたらしい。

「まあ、合宿をやっていたときに体育館でバスケットとかやる

うって、当時の合宿所なんかはテレビとかそういうのがあるわけではないですし、あれが何だ、携帯電話があるわけでもないで、話したりとかそういうことで時間を潰すしかなかったの、夜練やるうとかいいながらみんなでバスケットとかやるなかで、で体育館に行ったときに、先輩から『お前この、ここ知っているか』って連れていかれて、『この手の跡はな』なんていうふうに話をされたのを聞いておっかねえなあって」

以上の説明を信するならば、A教諭の語る「A高校七不思議」のほとんどは、一九八〇年代の終わりから九〇年代の初めにかけて、A高校の運動部で語られたものに起源を持つことになる。殊に「体育館の手跡」の場合、体育館が怪談の舞台となるのは、運動部員たちが日頃からそこで長い時間を過ごしているからだろう。彼らにとって、部活動の空間は教室以上に慣れ親しんだ愛着の場なのである。

(3) 「怪談」の内容

A教諭が語る「テケテケ」と「体育館の手跡」はそれぞれ以下のような内容である。

① 「テケテケ」

- (a) サッカー部の一年生が教室で着替えていて怪しい雰囲気を感じく。
- (b) 何かが壁に「ドン！」とぶつかって一年生が驚く。
- (c) 地上から〇・〇三ミリの距離で人間の上半身が床に浮いて

いる。手と首をマツハ三でくるくる回している。

(d) 怪物は「みーたーな」と一年生を追ってくるが、走る速度は人並みである。

(e) 一年生がトイレに逃げ込むと、怪物もそこに入ってくる。

(f) トイレの個室に隠れるが、怪物は耳障りな回転音と共にトイレの個室をひとつひとつ確認しだす。

(g) 怪物が入ってこられないよう戸を押さえているうちに静かになる。

(h) 安心した一年生が上を見ると、個室を天井から覗きこむ怪物と目が合う。

(i) 気絶し守衛に発見された一年生は「テケテケがテケテケが」と口走るばかりだった。

(j) テケテケの居場所は年々変わっているから、近々この教室の近くにも出るかもしれない。だから、あまり遅くまで学校に残っていると危ない。

② 「体育館の手跡」

(a) ネットなどでも話題らしいが、A高校の体育館は怖い場所だという。

(b) なぜ怖いのか、先生（語り手）がまだ生徒だったころ、部活動の先輩から教わった話がある。

(c) むかし体育館二階のシャワー室で自殺した生徒がいたらしい。

(d) その生徒はどこかで手首を切ってきたらしいが、酸素不足で苦しいものだから、階段を上るとき、その壁に手つき跡になったという。そして二階で首を吊って死んだ。

(e) その階段の手跡は、どんなにペンキで消してもまた浮かび上がってくるそうだ。どれがその手跡なのか確かめられたらと思うが、体育館は建て替えられたので知りようがない。

(f) 取り壊しの際は何か起こると思った。しかし結局何もなかった。

(g) 本当か嘘かわからないが、これは自分が先輩から聞いた話そのままである。

以上の二話とも「学校の怪談」としては普遍的な内容のもので、似たような話は誰もがどこかで耳にしたことがあるだろう¹⁷⁾。これらの話が生徒に人気なのは、その内容よりも、A教諭の話しぶりにあるようだ。「テケテケ」においては特にオノマトペや擬音が駆使され、身振り手振りを交えてパフォーマンスな「語り」がなされる。A教諭は怪物が音を立てて出現する場面に合わせ、「ドン！」と教卓を叩いて聞き手を驚かせたり、「みーたーなー」「いたー」などと、声色を使い臨場感たっぷりに怪物を演じる。また、テケテケのキャラクター描写もユニークであり、上半身だけで地上から○・○三ミリ浮きながら、首と手がマッハ三の高速で「ウインウイン」と回るのだという。しかもおかしなことに、そんなに速いテケテケであるのに、追ってくる速度

は人並み程度でしかなく、真つ直ぐにしか進めないというのである。

こうした描写だけから判断しても、A教諭の「怪談」が「面白おかしい」ものであり、聞き手を沸かせるための笑いに満ちていることがわかるだろう。そのためなのか、勉強に疲れて眠りこんでしまった生徒も、「学校の怪談」を聞けば目を覚まし、また集中して授業に取り組むことができるのだという。

これに対して、過激な内容で学園のタブーに触れるのが「体育館の手跡」である。事件があったとされるA高校の旧第一体育館は、「中で鳩が飛んだりするような」古めかしい建物であり、A教諭の時代には白壁にボールが当たったり、生徒が触ったりして、手あかのような黒い汚れが無数についていた。そのひとつが、消しても消えない血の手形とされており、自殺した生徒の噂がまことしやかに語られていたのである。ただ、どれが問題の手形なのか、九〇年代当時から知っている者が誰もおらず、やがて体育館自体が取り壊されてしまった。ところが何故かこの話だけは「本当にあったこと」として長く語り継がれてきたのであった。

ところで、近年A高校の教師はこの話を生徒に聞かせる時、やや慎重な配慮をすることがあるらしい。「体育館の手跡」の存在はA高校の関係者間では「ほぼ知らない人がないほど有名」なのだが、もつとくわしい内容を知りたいと、生徒のほうから教師に「お話」をせがんでも、時には断られるそうである。元

生徒からの情報によれば、一年生のとき、別のB教諭が、とあるクラスの授業中に「怖い話」をしたとき、「キヤー」といって過剰に怯えた生徒がいた。そのためB教諭は、授業中にもうこの「怪談」を話すのをやめてしまったという。しかし、生徒の一部はそれが大きな不満で、かえって事件の真相に強い好奇心を抱いた。ある被調査者は、「絶対にキヤーと言わない」約束で、B教諭から個人的に話を聞き出したという。

いっぽう、「怪談」に対し冷静な態度を示す生徒もいたらしい。「X組だったんですけど。X組は、なんかそのB先生が怖い話をZ組だっけ？でしたら、キヤーと騒がれたから、もうしないうて：言ってたけど、したそうな顔してたんだよね。めっちゃ。で、話したほうがいい？って言われたから、いや、うちらどっちでもっていう感じで、無反応だったから、じゃしない、って言われて、されなかった。で、三年ときにA先生が、みんなの前でしてくれた」という報告もあった。

ただいづれにせよ、「体育館の手跡」は生徒の死を扱った物語であり、万一聞き手が話の主人公にあまりにも感情移入したり、現実の出来事に引き寄せて「事件」として再解釈したりすると、教師が「怖い話を楽しく」話すのは難しい。語り収めの部分で、A教諭が「先輩から聞いた話そのまま語った」とし、「本当かどうかはわからない」と強調するのは、生徒のそうした反応を警戒しているのだろう。もちろん、大多数の生徒は「学校の怪談」を「怖くて面白い話」として享受するが、なかには話をフイ

クションとしては楽しめない生徒がいる。そのため教師は聞き手の反応を伺いつつ、今ここで「怪談」をするのが許される状況なのか、その場で慎重に判断しなくてはならないのだ。た。

3、聞き手による再解釈と記憶される「怪談」

(1) 聞き手による再解釈

A教諭の熱演のせいもあり、一連の「学校の怪談」は聞き手の生徒たちに極めて強い印象を与えた。しかしその内容を元生徒たちに尋ねてみると、聞いたものとはかなり異なる話をする例が多かった。以下では、最も揺れ幅が大きかった「体育館の手跡」を例にして、「怪談の記憶」をめぐる教師と生徒のずれを検証する。

A教諭の「体育館の手跡」が「もつとも記憶に残る」怪談だと報告した元生徒は6名だが、覚えている話の内容がA教諭のものとは一致したのは1例だけだった。元生徒たちは「A高校の柔道場の近くで女子高生が殺されて壁に血があつて新しく変えたらしい」と、「怪談」を殺人事件にしてしまったり、体育館取り壊しの理由を想像たくましく推測し、怪異が起るから建物新築したのだと主張したりした。

また、「女の子が家に帰ってこない」と学校に連絡があり警備の人が学校見回りしていたら見つからず体育館についていたシャワー室を開けたところ女の子が入っていて自殺していたところ

が見つかったという話」などと、死体発見の経緯をドラマチックに解説する例もあった。甚だしい場合には、「体育館に繋がる渡り廊下にテケテケの手跡があるという噂があり、その手跡を隠すためにシートが敷かれている」と、「テケテケ」とミックスした新しい「お話」まで作られた。

こうした創造的再生産はなぜ起こったのだろうか。報告者たち自身が説明するところによると、理由としては「A先生以外からも似たような怪談を聞いたから、それと混ぜたのではないか」「怖い話なので無意識的に忘れたいのかもしれない」「少し前のことなので記憶が不確かだった」といったことが考えられるという。なかには「本当は話をよく聞いていなかったのかもしれない」という消極的意見もあったが、一年前に聞いた話でも、聞き手の間でこれほどの差異が生じたのは興味深い。

ともあれ、「怪談」が伝承化されるメカニズムを考える上では、たとえ事実とは異なっても、元生徒たちの多くが「怪談」の多くを「A先生から聞いた話」として記憶していたことが重要だろう。A教諭の話はそれだけインパクトが強く、多くの生徒たちにとつて忘れ難いものだったのである。

A教諭が生徒たちから「学校の怪談」の名手とみなされている事実は、同一怪談の語り手を異にするバージョンとの内容的差異からも伺える。例えば「体育館の手跡」を友達から聞いたとする元生徒は以下のような報告をしている。

「高校の体育館の二階のシャワー室で、リストカットで自殺し

た子がいてでも死にきれずに階段に手形が残った」⁽¹⁹⁾

「第一体育館だけ新しいのは、いじめられて旧第一体育館で自殺をしてしまった女の子の血が旧第一体育館の壁に飛び散っていたから、他の校舎はみんな古いのに第一体育館だけ新しくなつたと聞きました」

このように、たとえ同じ内容の「怪談」であっても、もし「噂話」として子どもたちの口の端に上れば、話の雰囲気はがらりと変わるのである。生徒の死は「リストカット」や「いじめ」と結びつけられ、俄に聞き手の現実を突くものとなる。「怪談」は、口にするのも憚られる忌まわしい事件として語られるのであった。⁽²⁰⁾

しかし、A教諭から「お話」を聞かされた生徒たちが、自殺した主人公に過度に感情移入したり、自分まで不安になったりした例はほとんどない。もちろん「聞いた時、怖すぎて叫んだ」「泣いた」という報告もあったが、「聞いたときは真に迫って怖かったが、後で考えたらどうも変だった」と、「怪談」を話芸として純粋に楽しむ姿も見られた。

教室という安全な場において、親しい教師が巧みな話術で語る「学校の怪談」は、その内容がいかに「怖い」ものであっても、現実のレベルで生徒を脅かし危険に晒すことはない。教師との信頼関係が、生徒と物語との距離を適切に保つのである。

(2) 思い出に残る「学校の怪談」

「体育館の手跡」については話の再創造が目立ったが、「テケテケ」のほうには、自分で調べた事項を話の説明として付け加えた報告者がいた。

「テケテケ…下半身が切断されて上半身だけの姿の女子中学生や女性の亡霊。事故などで下半身が切断されてしまった女性、あるいはその人が妖怪化したものとされている。足が無いので空中を浮遊するか肘を使って移動するのが特徴で、このときの両手だけで歩く擬音から『テケテケ』という名前が与えられた。私の学年は赤学年だった。赤い物を身につけていると体を真っ二つにされる」

この事例報告は、まるで妖怪の wikipedia 的説明のようだが、いかにも唐突に「私の学年は〜」で始まる部分が興味深い。「赤学年」の「赤」とは、スポーツウェアのラインなどにつく学年カラーのことで、A高校では赤緑青の三色により上級生、下級生の識別をするのである。このカラーは入学のときに決まり、三年を通じて同じ色であることから、学園生活の思い出として記憶に残る場合が多い。

報告をした元生徒に、改めてこの俗信の発信源について尋ねてみると、上がったのはまたA教諭の名であった。A教諭はその「赤学年」の生徒たちに向かい、「みんなは赤学年だからテケテケに狙われるぞ」と話したそうである。よほど印象的だったのだろうか。その場にいた報告者の友人も同じく記憶を蘇らせ

「確かに聞いた！」と、しきりに懐かしがっていた。²⁾

本報告者の場合は、A教諭に聞いた「テケテケ」の話の内容は、今では「もう忘れてしまって」、でもただひとつだけ明確に覚えているのが、その「赤学年」の話だったそうである。話をするA教諭の姿が記憶に強く残り、現在では「人生でもっとも思い出に残る『学校の怪談』」になっているようだ。

ところが、筆者がこの「俗信」の詳しい内容をA教諭に尋ねてみると、A教諭のほうは、そんな話を生徒にした覚えはないと述べた。語りの名手が自身のレパートリーを忘れるとは思えないから、これもまた元生徒たちの記憶違いや、創造性の表れなのだろうか。先に述べたように、A高校の「学校の怪談」は元生徒の記憶のなかで大きな変貌を遂げ、聞いたものとは全く異なる「お話」になることすらあったのである。

しかし本事例の場合は、必ずしも元生徒たちの記憶違いではないかもしれない。A教諭はこれまでも自身が聞いた「テケテケ」の話を微修正し、聞き手の興味関心にあわせた変更を行ったことがあった。例えば、校舎内における「テケテケ」の生息地だが、A教諭の「お話」だと、目撃者との遭遇場所が長い年月をかけて変わってきたことになっている。最初それはX階に出たが、A教諭の教育実習のときはY階、晴れて教師となり母校に帰ってくると、今度はZ階に出るようになった。「そうやって段々この教室に近づいてるのかもしれない」だから遅くまでこの教室に残っているとテケテケがでるぞ」と話を結ぶのであ

る。

A教諭の説明によれば、この修正は、生徒に話を自分のこととして聞いてもらうための工夫だという。A高校には、本来テケテケがいる場所とは別の校舎で学園生活を送る生徒たちもいる。そんな生徒たちにも怪談を楽しんで欲しいから、本来の話をし変えて、テケテケがどんどん近づいていることにしたそう

だ。
じじつ、元生徒たちにテケテケの出現場所を聞いてみると「北校舎」と答えたグループと「南校舎」と答えたグループに分かれており、話の内容が食い違っていることがわかった。しかし多くの生徒たちは、A教諭の配慮には全く気づかず、自分の聞いた話が「正しい」バージョンだと信じて卒業していったのである。

以上のことから判断すれば、「テケテケが赤学年を狙う」というのも、これと同じようなA教諭のサービスである可能性が高い⁽²³⁾。おそらくA教諭は、「テケテケ」の話をよりリアリティに満ちたものにするため、語り収めの部分に刺激的なエピソードを付け足したのではないだろうか。生徒の顔を見ながら即興で度々違うことを話すことから、語り手のほうは誰にどう語ったかもう記憶にないのかもしれない。

むろん、どちらの証言がより真実に近いのかわからない以上、実際のこととは確かめようがない。ただ、聞き手の生徒の一部がいつまでも覚えているのが、テケテケの「お話」の主要部分で

なく、どちらかといえば本筋を外れた箇所だったことは、「学校の怪談」の本質を理解するうえで重要だと思われる。

A教諭は確かに話術が巧みであり、「怪談」の内容も長年の経験で洗練されている。しかし、元生徒たちは語りの内容よりむしろ、A教諭の口癖、しぐさ、容貌、パフォーマンスなど、「語りの場」に関わることのほうをよく覚えていたのである。

殊に、今回の「学校の怪談」の聞き取り調査でしばしば話題に上がったのは、A教諭が愛用している学園の「黄色いタオル」のことであった。元生徒たちによれば、「A先生はいつも黄色いタオルを首にかけて」いて、しかも「学校の怪談のときはそのタオルを外す」のが印象的なのだという。授業中も「いつも汗をかいている」のだが、「お話のときは特にそうなり、それを拭き拭き」「とても楽しそうに話すんだ」というのである。

この「黄色いタオル」とは、A学園のスクールカラーの黄色地に、目立つフォントで高校名が書かれた洒落たスタイルのものである。関係者に広く支給され、高校サッカーや甲子園などの応援で使われるばかりか、運動部の「応援グッズ」として学外にも頒布されている。「黄色いタオル」は、A学園の存在を広く全国の人々に知らしめるためのツールになっているのだ。

運動部出身のA教諭がこの「黄色いタオル」を愛用するのは、大量に作られたこの品が学園関係者にとって利用しやすいためである。しかし、それを身につけた教師が「学校の怪談」を語ったならば、「お話」にはまた格別の効果が生まれることにな

る。聞き手である生徒からすると、このタオルはまさにA学園の象徴に他ならない。そして、卒業生であるA教諭もまた、学園の伝統を体現する存在なのである。それらしい小道具に加え、その半生を学園内で過ごしたという経歴が、「学校の怪談」に信憑性を付加しているのである。A教諭の「お話」には「作り」も含まれるが、にもかかわらず、学園共同体の真正な伝承と見做されるのであった。

なお、以上の事例においては、「赤」「黄」の鮮やかな視覚的イメージが「学校の怪談」の記憶を定着させる上で効果的な役割を果たしている。もちろん「赤」は血の色だが、こうした目立つ色のイメージは、必ずしも聞き手の生理的嫌悪感を煽るばかりではなかった。A教諭の「お話」がA高校を代表する「学校の怪談」となるに至ったのは、スクールカラーの「黄」と学年カラーの「赤」を通じて、聞き手の生徒が「お話」を自身に直接関わるものと感ずることができたからだろう。生徒たちは、帰属意識との関わりから「世間話」を自分事化したのである。そしてその感覚こそが「学校の怪談」を伝説化させ、懐かしさの感情と共に学校時代の記憶を創り出すのだった。

おわりに

筆者の課題は、「学校の怪談」の現代的様相について論じることであったが、本考察はあくまでもA学園という小集団内の事

例分析に留まっている。現代日本の「学校文化」一般についての抽象度の高い議論を展開するには、さらなる事例収集と比較研究が求められよう。また、「学校の怪談」の語り手論としても、豊かな先行研究が存在する「昔話の語り手論」に匹敵するレベルには至っていない。

ただ、筆者は本論考で「教師」という語り手の存在に注目することにより、「学校の怪談」の「子ども文化」としての位相を考察することができた。子どもだけの純粹な文化と思われがちな「学校の怪談」だが、じつさいには他の「子ども文化」と同様、教師や研究者などの大人が学校の「怪談文化」を支えている。特に、現代の学校では生徒への繊細な配慮が求められるため、「語り手」である教師は、自らが語る「怪談」が聞き手にポジティブな効果を生むよう絶えず苦心するのである。ところが、話を聞いた生徒たちはしばしば自由な創造性を発揮し、多くの「異伝」や訛伝を大胆に再生産する。そのため巧みな語り手は、危険な連想を誘発する語彙を避けるなど慎重に話の細部を練り、彼らの空想があくまでも健全な領域に留まるよう努めるのだった。

「学校の怪談」が時として懐かしさの感情と共に回顧されるのは、多くの大人にとって、それが自身の子ども時代や青春時代の記憶と結びついているからである。ただし、ほとんどの場合、聞き手は正確な「学校の怪談」の内容など覚えていない。「語り」の内容でなく、話の場の雰囲気や、語り手の演技といった、「語

り」の周辺にあるものの方がいつまでも記憶の底に留まり、人々に懐かしさの感情を喚起する。「赤」「黄」といった心に残りやすい色のイメージが、「学校の怪談」に関する感情的記憶の拠り所となるのもそのためである。

注

- (1) 常光徹『学校の怪談』角川書店 二〇〇二 10頁
- (2) 同上14頁
- (3) 「学校の怪談」ブーム以降の「怪談」を取り巻く状況の変化については、特集「学校におぼけはもういない？」『子どもの文化』6月号 こどもの文化研究所 二〇一九および、一柳廣孝編『学校の怪談』はささやく 二〇〇五 青弓社を参照。
- (4) 吉岡一志「子どもの主体性礼賛を越えて―『学校の怪談』をめぐる教師と子ども」『子どもへの視覚―新しい子ども社会研究』新曜社 二〇二〇 45〜47頁
- (5) 「学校の怪談」の場合は、物語の伝播や享受の過程で研究者の介入が強くなされた。高木史人「研究者というメディア」『口承文芸研究』23 二〇〇〇
- (6) 山田敏子『『社交』と『ふるまい』―学校という舞台』二〇〇五 一柳編前掲書所収。
- (7) 鶴野祐介『子どもの替え唄と戦争―笠木透のラスト・メッセージ』二〇二〇 子どもの文化研究所
- (8) 吉岡一志「大人のまなざしが生み出す子ども文化―教師は『学校の怪談』をいかに語るのか」『児童文化研究』48 二〇一五
- (9) 川島理想「ゲーム化する『怪談』に関する考察―児童館での調査報告」『口承文芸研究』42 二〇一九
- (10) 歴史的事件についての「異伝」や訛伝を調査すると、社会集団の心性や歴史意識を解明する糸口になる。斎藤純「伝説・世間話の交錯と異伝の成立―奈良県吉野郡東吉野村の事例を中心に」『世間話研究』1 一九八九、同「異伝のもつ意味―農村の村開発伝承を例として」『足立区郷土博物館紀要』5 一九八八を参照。
- (11) 事例数と被調査者数が一致しないのは、複数の「怪談」について報告した被調査者などが存在するからである。なお、この調査成果全体についての分析は機会を改めて行うことにしたい。
- (12) これらの「お話」について報告者は様々なタイトルをつけているが、本論文では便宜上このような呼称に統一した。
- (13) 「その他」に分類したのは、「どの先生に聞いたか忘れてしまった」「先生の名前を忘れてしまった」などの回答である。現在と異なり、A教諭の青年時代のA学園にはまだ教員養成過程を持つ大学部門がなかった。
- (14) 俗信としての「学校の怪談」については、伊藤龍平「口裂け女は話されたか―『俗信』と『説話』」『口承文芸研究』44 二〇二一参照
- (15) 七不思議は、1、テケテケ、2、体育館の手跡、3、謎の小學生、4、冷たい水道、5、柔道場近くのトイレ、6、怪し

い弓道場などだが、1、2以外の「怪談」については場を改めて論じたい。なお、本論文に示した七不思議の呼称は便宜的なもので、語り手によって少しずつ異なっている。

(17) 九〇年代の若者に語られていたテケテケの怪談については、宮廻和男「パフォーマンズ、テキスト、ジャンル…理論的考察」下『法政人類学』63 一九九五で分析がなされているが、内容的にはA高校のものほとんど同じである。

(18) 「テケテケ」の怪談について、A教諭の語りの一部を以下にそのまま示しておく。括弧に入れた部分は筆者に対する説明である。「物にぶつかなければ方向転換できないはずのテケテケが中に入ってきたんだと。で、ドアのこういうところをツカツカツツカ、ダダダダと叩きながら（ここで教卓をたたたくんですけど、バーン、と言うと、ううつとなるから）入ってきて（自分、台のとこうやって押さえてるんですけど）、隣、ウオンウオンウオン、とマツハ3なので音がする。ウインウインと回って。『いなーい』つって、で、自分のほうくるときにバツと手を押さえてたのがダダダダダと、そのマツハ3の衝撃がダダダダダとくるんだと。で。きてバツと押さえてたらそのままウウウウウとそのまま音が小っちゃくなつて、どうも出て行つたっぽいと、ああ、よかつたと思って、ふつと上を見たら、上にそいつがいて『いたー』って見つかつたんだと」

(19) 傍線筆者。以下同じ。

(20) 特にこの「噂話」のなかでは、事件が「リストカット」「い

じめ」といった、近年問題視される社会現象と直接結びつけられていることが注目される。このことを「生徒の心の叫び」と解釈すべきか、それとも、話の信憑性を高めるための紋切り型だと見なすべきか、現段階で結論づけるのは難しいが、この話を聞いた他高校出身の短大生からは「現代の学校では、そういうことが十分あり得ると感じた」「死んだ人の気持ちかわかる」というラジカルな意見も寄せられた。

(21) 個室で第三者を交えずインタビュー調査を行うつもりだったが、調査に関心を持った元同級生が好奇心から飛び入り参加し、三人でディスカッションすることになった。

(22) それにも関わらず、本報告者は、テケテケについて文献で調べた内容を冒頭で述べている。話の断片だけでは短すぎて「報告」になり得ないと判断したかららしい。

(23) 永島大輝氏からのご教示によると、テケテケが赤いものを狙うという俗信は現代の若者に広く知られているらしい。この俗信はフィクションで、元来は恐怖映画のなかの設定だったものが、メディアを通じて拡散したという。永島大輝「資料令和二年度日々の俗信・世間話報告」『昔話伝説研究』40 二〇二一 同「テケテケの誕生」『ましらだま』 番号（同人誌）二〇二一参照。

(さとう・さくいちろう／日本民俗学研究者)